法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-06-01

仲宗根先生を偲んで

本村, つる / MOTOMURA, Tsuru

(出版者 / Publisher)
法政大学沖縄文化研究所
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
沖縄文化研究 / 沖縄文化研究
(巻 / Volume)
22
(開始ページ / Start Page)
36
(終了ページ / End Page)
38
(発行年 / Year)
1996-02-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00002696

仲宗根先生を偲んで

本村　つる

一九九五年二月十四日、仲宗根先生はとうとう亡くなられました。二月初め頃仲宗根先生のお見舞に伺った時には、静かに休んでおられ、「先生、先生」と声をかけると、かすかに目をあけられ、ほほえんでおられるように見受けられました。突然の訃報に接した時は、晴天のへきれきの如く大変なショックでした。その頃は資料館運営委員会で計画し、作成した証言ビデオを先生にお見せしたいと準備している矢先でした。先生に、そのビデオをお見せすることが、一日のばしにした為、お目にかける機会を失ったことを、今だに悔恨の念にかられております。

先生のお通夜には教え子の狩俣幸子さんが、今帰仁の先生のお庭から手折ってきた、赤い緋寒桜が枕許に供えられていました。「願はくは花の下にて春死なん…」という西行法師の歌を思い出し感慨一入のものがありました。先生は仏様のようなお姿でおだやかな大往生でした。その晩は大勢の教え子達に見守られ。

今帰仁でのご納骨の十七日には、お墓への道々も、緋寒桜が満開で、先生がこよなく生涯愛したふ

る里の心にふれた思いがして、感無量でした。

その日今帰仁まで先生の愛嬢おりえさんとご一緒しましたが、先生のご日常の話をうけたまわり、数々のほほえましいエピソードに先生のお人柄に改めて親しみを感じました。

仲宗根先生は、沖縄戦で九死に一生を得られ、「亡くなった乙女らが書き残そうとした厳粛な事実を私は誤りなく伝えなければならない義務を負わされている。この記録は私にとっては懺悔録でもある。」と、「ひめゆりの塔をめぐる人々の手記」をお書きになりました。ひめゆりの塔はいち早く人々に知れ渡り、多くの方々が花を手向けて下さいます。しかし月日が経つにつれ、戦争体験は風化され、伝説化されようとしています。私達も、ひめゆり学徒が美化されることを大変に恐れます。

仲宗根先生は、「ひめゆりの塔を美化して考えることは、将来再び危険性が多分にあり「ひめゆりの乙女達に続け」とならないとも限らない。」と警告されておられました。

先生は毎年の慰霊祭の弔辞に、亡くなった方々への深い思いをのべておられました。先生の弔辞は、私達生き残りにとってもいつも、心がしずまり安らかな気持になったものです。先生はその行動と私達への語らいの中で、常に、戦争の実相を伝える勇気を与えて下さいました。私達は、先生が静かに語られるあのおやさしいお言葉の中に、平和を愛し、人間を愛することの大切さを学びました。先生は決して難かしいことはおっしゃいませんでした。一人ひとりを平等に大切にされ、戦時中の話になるといつまでも延々とつづきました。先生はとても聞き上手でいらっしゃいました。

戦後、亡き上原婦長（沖縄陸軍病院第一外科婦長）のご霊前に感謝状を贈られ、ひめゆり学徒が世話になったお礼を切々とのべられておられました。又生徒達が戦争中お世話になった照屋キクさんのお父様にも感謝状を贈って下さいました。そのほかにも、色々深い気配りをして下さり、私達はいつも、先生のやさしいお心に深く感動と限りない教えを頂きました。

仲宗根先生はそのご生涯をひめゆりの塔にこだわり続けてこられました。

私達は仲宗根先生が残されたご教訓を深く心に刻み、戦争体験の生き証人として、資料館の中で、又県内外の小中高校生の平和学習の場で戦争の実相を語り、生命の尊さ、平和の有難さを訴え続けたいと思います。

先生どうぞ安らかにお休み下さいませ。心からご冥福をお祈り申し上げます。

合　掌